

く、今回の研究に最も適している地域であると考えられる本山地域を対象としている。

本報告の小結としては、本山地域の町は、銅山閉山によって衰退したが、神社活動については、現状維持が困難で、町復興の可能性も低いと思われる中でも神社への地域住民の関心が高く、毎年の例祭もきちんとされていることが調査によって明らかになった。

今後の課題としては、本報告のために行った追加調査で現存する五つの集落は他所の地区の祭りとは一切関わりを持っていないことが判明した。また、地区は大きく分けて坑夫こうふと町部ちやうぶに分類することができ、神社に対する関心についても異なる性格を持つていることが明らかになった。それは一体どのようなことなのか、また、それには単一産業集落の持つ性格と何らかの関係があるのかについて次回の調査で明らかにしたい。

洪水と稲作儀礼

——大垣市十六町の粥占いを中心に——

下 本 英 津 子

粥占いは、日本列島に広く分布する儀礼だが、占いという性質のためか実態は不明な点が多い。井之口は、「超人間的な力の存在を信じ、それに対処する知識や技術」である俗信の一つとして、粥占いを位置づけた（井之口章次『日本の俗信』弘文堂、一九七五）。また谷口は、粥占いの特徴として、実際の生

産活動を規定する側面を持つことを示唆している（谷口貢「年占の形態と宗教構造」『宗教学論集十号』駒沢大学宗教学研究會、一九八〇）。

本発表では、こうした先行研究を踏まえて、大垣市十六町で行われる粥占いを取り上げる。十六町における自然環境や稲作農耕から、粥占いという儀礼を分析したい。

大垣市十六町は、濃尾平野北西部の氾濫原に位置している。地下水や河川など、水が豊富であり、かつては自然に水が湧く自噴井が多くあった。夏期は特に地下水位が高まり、耕地にしばしば水がにじみ出る。そのため水田稲作には向くが畑作には向かず、畑は耕地全体の一〇二割の微高地に限られる。また時に水は氾濫を起こすため、十六町には、集落と耕地の一部を囲う輪中堤防が作られている。水の統御は輪中全体で行われる。十六町の耕地は、堤防内と堤防外にそれぞれ分散して所有されている。このように、十六町は水の恵みを受ける水田地帯であり、同時に水の規定を強く受ける地域である。

粥占いは、正月一五日に近い日曜日に行われる。粥占いを行う場所は八幡神社である。八幡神社は、十六町の最北西部に位置している。町内で最も標高が高く、水につきにくい。近世の絵図によると、ここは隣村からの取水口であり、またかつては境内に自噴井があった。この意味で八幡社は重要な取水口の一つである。このように八幡社は、水利用と水防を象徴する神社である。

十六町の粥占いは、麻縄で縛った女竹二〇本を使用する。竹筒を小豆粥の釜に入れ、粥が煮たったら取り出し、竹筒の中に

入った小豆の量で作物の豊凶を占う。粥占いには神職は参加せず、自治会、各班の当番を中心に行う。占いの対象となる作物は、「麻、菜種、大麦、小麦、草種、大豆、小豆、ひえ、とうきび、木綿、いも、そば、大根、早稲、中稲、晚稲、上田、下田、蚕、一切草木」の二〇種である。上田、下田はそれぞれ輪中堤防内、堤防外の水田を指す。二〇種のうち畑作物は、麻、木綿、とうきび、大根、いもの五種のみである。蚕、一切草木を除く作物の多くは、田、あるいは田の畔で作られる。このように十六町においては、粥占いの対象は田作物が中心となる。

これらの作物は、現在ではほとんど作付されていない。昭和初期の農耕の聞取りによると、これらの作物を作付する際特に注意が必要なのは、小麦、大麦、蕎麦などの裏作物と稲作の切り替えである。麦や蕎麦を作付するには、耕地が乾燥している必要がある。しかし周辺に湛水中の水田があると、水がにじみ耕地が濡れてしまう。十六町では、耕地の所有が分散しているため、周辺耕地の所有者と作業日程の相談が必須となる。このように作付は個人の問題ではなく集団の問題となっている。

以上の検討から、十六町の粥占いは、以下のように分析できる。（１）水の規制を強く受けるため、水は人間を越えた存在とされており、粥占いはそれに対処する判断基準の一つであること。（２）町単位で粥占いを行うことによって、水の神意のもとで作付を行う事を成員全体で確認する。そして結果に基づいた協議の上で作付が工夫される。これによって作付は個々人の勝手を離れ、稲作農耕は強い協調性を持つ。

このように十六町の粥占いには、水を人間とは別次元に置

き、それを共同で認識した上で作付する仕組みがあった。これは水防と水利利用のはざまで生きる人々の工夫と言える。

流行神をめぐる一考察

黄 緑 萍

本発表では、二〇〇三年から急に流行り出した「幸運の女神」、「福の神仙台四郎の現代版」とされる仙台幸子を事例として取り上げ、その信仰の展開過程を把握した。その際には、流行神に関する先行研究の指摘に留意し、それとの比較に立つて特徴を考察した。

仙台幸子とは、実在の人物を元に作られた幸運を呼ぶとされるキャラクターである。そのキャラクターとなった人物は「幸子」という名の女性である。実の娘の峰ハチヨが二〇〇一年から自分のホームページに、母の立ち寄る所に人が押し寄せてくるというエピソードを載せ、仙台四郎に因んで「仙台幸子」と命名した。二〇〇三年には東北放送のラジオで報道され、それをきっかけに峰ハチヨは「幸子」の一歳頃の写真を使った新たなグッズを製作した。これが頒布されると「ご利益があった」との声が寄せられてきた。その後、仙台幸子は次々とメディアに取り上げられ、広く知られるようになった。しかし二〇〇六年からその報道は減少し、二〇一〇年以降になるとメディアからはほとんど取り上げられなくなった。

本発表は仙台幸子の展開過程、幸子本人の特徴及び購入者の